

評価分科会総合評価

研究課題名：B6 海溝沿い巨大地震の地震像の即時的把握に関する研究

評価委員

委員長 古川信雄

委員 木村富士男、小泉尚嗣、泊次郎、渡辺秀文

評価年月日：平成 28 年 1 月 18 日

1. 総合評価

- ☒ 非常に優れた研究であった。
- ☐ 優れた研究であった。
- ☐ 研究を実施した意義はあった。
- ☐ 失敗であった。

2. 総合所見

南海トラフの巨大地震の発生が懸念されている折、海溝沿い巨大地震の地震像の即時的把握と情報伝達は、減災対策における中核であり、社会に大きな恩恵をもたらす社会的な意義のある研究である。また、研究成果が多くの学会発表と査読論文発表されていることから分かるように、その学術的価値も極めて高い。

本研究は、2011 年東北地方太平洋沖地震の発生を受けて、当初計画から変更を行っているが、この点も含め、研究目標や研究体制は適切であった。特に、この地震における気象庁業務に対する外部からの批判に真摯に応えて、学術・防災の両方の面に貢献する成果をあげたことは賞賛に値する。

成果としては、海溝沿い巨大地震の規模、震源、断層面、滑り分布、地震動分布などを即時的に推定する手法を多数開発し、気象庁の地震監視業務に取り入れることができた。このことは、研究課題の達成がより重要性・緊急性をもつことが認識され、研究期間が 1 年延長されたことを割り引いても、当初想定以上の成果を得られたといえる。業務化された本研究の成果により、次の巨大地震発生時には気象庁から適切な情報が発信されることが期待される。

一方で、成果の社会への発信が極めて控えめであった。国際的にみても優れている研究であることを、わかりやすく広報をしていただきたい。

今後は、津波の規模の過小評価につながりかねない、津波地震の規模推定の高度化を行う後継研究を着実に取り組み、成果をあげてほしい。

なお、2011 年東北地方太平洋沖地震の被害と本研究の成果に鑑みるに、「研究開始がもう少し早く、業務化が地震発生前になされていたなら」との思いは禁じ得ないものがある。